

肝鬱による胃脘痛の治療と半夏瀉心湯の使い方

講師：路 京華 老師

レポート： 岸 奈治郎（平成日高クリニック 和漢診療部）

【第6回】2013年7月6日

【第7回】2013年11月2日

【症例】 63歳女性

【主訴】 3年前から続く胃脘痛

【現病歴】

初診：2012年8月11日

3年前にひどく気分が悪くなったのをきっかけとして、胃脘痛を引き起こした。その後、辛いものや冷たいもの、硬い食物を食べた後胃痛を誘発する。中医専門用語の撐脹という症状を呈する。支えて脹るような感じで、時に胸焼けがして胃酸が口に上がってくる。食欲は大体普通で、便通は毎日一回、異常なし。ここ3年近くで体重が7.5キロ減少した。

1年前に胃カメラにより幽門型粘膜慢性炎症があり、固有層内繊維組織増殖で、散在的に泡沫状細胞を認める。消炎剤、または胃粘膜保護剤を服用したが、一定の効果はあるものの、根治できない。

【現症】

煩燥、怒りっぽい。時々胃脘痛がして、気分の悪い時、飲食不摂生時に疼痛が増悪する。食欲は普通。食後に胃が脹る。多夢、寝付きが少々悪い。二便正常。

【診察所見】

望診：体型がやや痩せ型、顔色が萎黄。

舌象：舌体胖。齒痕がある。舌質：淡。苔：黄厚膩。

脉象：脉左弦細沈 右弦滑無力

【考察】（——以降は著者のコメント）

- ・ 3年前に凄く気分が悪くなった事をきっかけとして、胃脘痛を引き起こした。——具体

的に「気分が悪く」となるということがどういうことなのか不明ではある。気分を害して肝気鬱結となったのか、嘔気がしたということなのか。

- ・ その後、辛いものや冷たいもの、硬い食物を食べた後胃痛を誘発する。——病位は胃のようだ。刺激物（邪）によって腹痛が誘発されると考えられるか。
- ・ 〈撐脹〉支えて脹るような感じで、時に胸焼けがして胃酸が口に上がってくる。——胃気上逆の症候であろう。
- ・ 食欲は大体普通で、便通は毎日1回、異常なし。——脾虚はどうであろう。
- ・ ここ3年近くで体重が7.5キロ減少した。——陰虚 or 気陰両虚か。脾虚でも体重減少が起こりうる。
- ・ 煩燥、怒りっぽい。——肝鬱が考えられる。
- ・ 気分の悪い時(これが何を指すのか曖昧ではある)、飲食不摂生時に疼痛が増悪する。——「気分の悪いとき」というのを「癢に触る」ような状態であると考えれば、肝気鬱結し、暴飲暴食を重ねた状態である。
- ・ 食欲は普通。——脾虚はどうか？
- ・ 食後に胃が脹る。——胃気の上逆、降下しない。
- ・ 多夢、寝付きが少々悪い。——肝気鬱結によって肝陰血を消耗したか。
- ・ 望診：体型がやや痩せ型——陰虚を思わせる。
- ・ 顔色が萎黄——もともと脾虚弱があるか。
- ・ 舌象：舌体胖。齒痕がある。——津液、湿の阻滯がありそう。気虚も考慮する。
- ・ 舌質：淡。——気虚血虚を疑わせる。
- ・ 苔：黄厚膩。——湿熱
- ・ 脉象：脉左弦細沈 ——肝気の緊張。細いので陰血虚損があるのか。
- ・ 右弦滑無力——肝気の緊張。滑は湿。

【解説】

胃気は降濁、脾気は昇精を主る。これらは、肝の疏泄作用によって補助されより効率よく機能している。「気分が悪くなって」肝の疏泄作用が障害されることにより、肝胃不和となり胃の降濁がうまく行かず、胃脘痛や胸焼けが出現すると考えられる。

また、「脾は生痰の源」と言われており、もともとあった脾虚に肝胃不和が影響を及ぼし、痰を生み熱化したために舌苔に黄厚膩が現れていると考えられる。

治療としては、疏肝和胃、清熱化痰が主となる。

【病性】 裏熱実

【病勢】 邪実

【病位】 肝 胃 脾

【病邪】 気滞 気逆 湿熱

【弁証】 木旺克土、胃氣痞塞、湿熱阻滯、気壅作痛

【治法】清肝和胃、開痞散結、清化湿熱、行氣止痛

【処方】半夏瀉心湯加減

太子参 12g	姜半夏 12g	干 姜 10g	黄 芩 12g
黄 連 8g	炒杏仁 9g	炒薏米 30g	厚朴花 12g
茵 陳 12g	杷葉 12g	刀 豆 6g	黛蛤散 8g (包)
醋香附 9g	甘 草 3g	大 棗 5g	生姜 1片

14日分，水煎服，日一劑

【太子参】 ナデシコ科 ワダソウの根塊 甘、微苦 平(やや涼) 補氣養陰 補氣生津 涼性で潤性の補氣薬

【厚朴花】 厚朴は樹皮だが、厚朴花は花の蕾。苦辛 温 芳香化湿、行氣寬胸湿濁、氣滯による上腹部の膨満、疼痛などに用いる。

【杷叶】 = 枇杷葉 苦辛 微寒 肺胃 肺と胃の熱を冷まし降ろす。清肺止咳・清胃止嘔

●黛蛤散 (たいごうさん)

青黛 海蛤殼 蒲黄

(主治) 清熱利肺，降逆除煩

(効能) 肝肺瀉熱。青黛 (せいたい) は藍染に使う青い成分で強力な清熱剤であり、肝肺の熱を良く去る。海蛤殼 (かいごうかく) はシジミの貝殻で清肺化痰し、熱性頑痰を良く除く。蒲黄 (ほおう) は蒲の花粉で甘平であり収斂し化瘀止血する。これらを配合すると肝、肺の熱が原因で咯血、煩躁した症例に対して、熱を除き血を止める作用を有する。

乾姜、半夏は辛開で固まった病原体(この場合は湿)を散ずる。

黄芩、黄連は苦降の性質で鬱熱を排泄する。

人参、甘草、大棗は補土(脾を補って)、扶正(正気を充実させる)働きがある。

醋香附、黛蛤散は解鬱清肝。

厚朴花、刀豆は降逆気、

杏仁、杷葉、薏苡仁は利湿を司っている。

半夏瀉心湯は傷寒論の辨太陽病脉證并治下、第七に見られる。

「傷寒五六日、嘔而發熱者、柴胡證具、而以他薬下之、柴胡證仍在者、復與柴胡湯。此雖已下之、不為逆、必蒸蒸而振、却發熱汗出而解。若心下滿而口痛者為結胸也、大陷胸湯主之。但滿而不痛者、此為痞、柴胡不中與之、宜半夏瀉心湯。」この分は大きく 3 つに分け



られ、それぞれ解説した。

1) 「傷寒五六日、嘔而發熱者、柴胡證具、而以他藥下之、柴胡證仍在者、復與柴胡湯。此雖已下之、不為逆、必蒸蒸而振、却發熱汗出而解。」

傷寒は「難経」第五十八難に「傷寒有五、有中風、有傷寒、有濕温、有熱病、有温病、其所苦各不同（傷寒には中風、傷寒、濕温、熱病、温病の五つがあり、それぞれによって症状は異なってくる。）」とある。この場合の傷寒は狭義の傷寒ということで、広義の傷寒の中に分類される狭義の傷寒で、いわゆる寒気を伴う急性疾患だ。嘔吐の「嘔」は有声無物、「吐」は有物無声である。寒気を伴う急性疾患に罹り5, 6日経って、吐き気を伴う発熱があり柴胡剤（小柴胡湯と思われる）を処方する症状があるにもかかわらず、医者が間違っ下剤（承気湯か）で下してしまった。それでもまだ柴胡剤の証があるものには小柴胡湯を投与しなさい。そうすればぼかぼかしてきて発汗して治る。

2) 「若心下滿而痛者為結胸也、大陷胸湯主之。」

若しみぞおちが張って痛みを訴える者は、誤って下したところに、邪熱が内陷して水と熱が結ばれて有形の邪となり膈にとどまるという結胸の状態になっている。それにより少陽経のみならず三陽すべてで気機阻滞が起こっているので、大陷胸湯を投与し邪を取り除く治療をなさい。

大陷胸湯は大黃、芒硝、甘遂で、みな下痢で邪を駆逐する方意である。

3) 「但滿而不痛者、此為痞、柴胡不中與之、宜半夏瀉心湯。」

誤下した後にみぞおちが張っているが痛みがない場合がある。もともと傷寒を引き起こした邪は除けていないので「実」である。また「傷寒五六日、嘔而發熱者」と「熱」があり、誤って下してしまったために心下は「虚」となり「寒」を伴う。つまり半夏瀉心湯の特徴は寒熱・虚実挟雑である。

清の時代に『傷寒来蘇集』を著した柯韵伯（かいんはく）によれば

「蓋瀉心湯方、既小柴胡去柴胡加黃連干姜湯也。不往来寒熱、是無半表症、故不用柴胡。痞因寒熱之氣互結而成、用黃連干姜之大寒大熱者、為之兩解。且取其苦先入心、辛以散邪耳。此痞本於嘔、故君以半夏生姜、能散水氣、干姜善散寒氣、凡嘔後痞硬、是上焦津液已干、寒氣留滯可知、故去生姜而倍干姜、痛本於心火内鬱、故用黃芩佐黃連以瀉心也。干姜助半夏之辛、黃芩協黃連之苦、痞硬自散、用參草大棗者、調既傷之脾胃、且以壯少陽之樞。」半夏瀉心湯は小柴胡湯から柴胡を去って黄連と乾姜を加えた処方である。往来寒熱はなく、半表半裏の経証はないので柴胡は使わない。痞は寒熱の気が結したものである。大寒の黄連と大熱の乾姜を用いる。黄連の苦味は心に入り、辛味は邪を散じる。この痞はもともとは嘔によるため水気を散じるため半夏と生姜を君薬としている。乾姜は寒を散じる。嘔吐の後の心下痞硬は上焦の津液が乾いたためであり、それは寒気が滞っているのを知る。であるから、生姜を去って乾姜を倍量入れるのだ。痛みは心火内鬱によるので黄芩、黄連を佐役として心火を去る。これが「瀉心湯」たる由縁である。乾姜は半夏の辛味を助け、黄芩と黄連の苦味は心下痞硬を散じる。人参、甘草、大棗はすでに傷ついた脾胃を調節し少

陽の嘔吐を治すのだ、と言っている。

半夏瀉心湯の治療目標は寒熱・虚実挟雑であるが、様々な症状に対して応用できる。

酸、逆、痛、腸鳴、軟利、腸満などの症状を伴うときには、半夏瀉心湯に以下の方剤を併用すると高い効果が得られる。

胃酸過多——左金丸

胃気上逆——半夏厚朴湯

胃気虚寒——理中湯、建中湯類

気滞胃痛——柴胡疏肝散

便軟下痢——香砂六君子湯

湿熱阻滯——加味温胆湯

気滞瘀阻——丹参飲

● 左金丸 (丹溪心法)

黄連 6g 呉茱萸 1g

(効能) 清肺瀉火・降逆止嘔

この方剤は苦・降・寒である黄連を多く用い肝火胃熱を取り除くのだが、そこに少量の呉茱萸をあわせている。呉茱萸は辛温であるが多量の黄連の前ではその温性は消失し、辛味によって開き、辛開苦降の作用を増強させる。であるから、この方剤が適する病態は、肝気鬱結により肝熱が肝火となり、下焦にある肝の熱が胃を犯し胃気上逆を生じた状態で、胸焼け、呑酸、嘔気嘔吐、胃痛、上腹部の痞えなどとともに、肝気鬱結の症状を伴うもの。路京華先生によると、胃カメラで胃粘膜の発赤、炎症があるような症例には黄連を使って炎症を取ることが出来る、とのことだった。

※黄連と呉茱萸の分量を入れ替えた「反左金丸」がある。胃寒による胃気上逆に用いる。

● 半夏厚朴湯 (金匱要略)

半夏 厚朴 茯苓 生姜 紫蘇葉

(効能) 行気解鬱・降逆化痰

● 理中湯、建中湯類

人参湯やその派生処方や小建中湯の類や大建中湯などにより、脾胃の虚寒を温める。半夏瀉心湯は寒熱・虚実挟雑であるから、その虚寒による腹痛や下痢などの症状を治療するのに良い。

● 柴胡疏肝散 (景岳全書)

柴胡 陳皮 川芎 香附子 枳殼 白芍 炙甘草

(効能) 疏肝行気・和血止痛

柴胡・芍薬で柔肝し肝の疏泄機能を取り戻す。陳皮、川芎、香附子、枳殼で疏泄機能低

下によって滞った気を巡らせ、炙甘草は急な症状を緩める働きをしている。

● 香砂六君子湯 (和剤局方)

六君子湯に木香(もっこう)、砂仁(しゃじん・縮砂とも呼ぶ)を加える。

木香は辛苦・温。強い芳香性があり脾胃大腸に入り良く気をめぐらせ腹部の張満、気滞証に用いられる。燥性が強いので脾胃虚による水湿の停滞に用いられるが、陰虚証には要注意である。砂仁は辛温でこちらも芳香性が強く燥性が強い。気を巡らせて湿を除くことで脾胃を整える。燥性が強いので陰虚証には禁忌である。六君子湯はもともと脾胃を補い湿を除く方剤である。半夏瀉心湯を使うような状態で、脾胃の虚寒により胃内停水を伴っているような場合は、木香、砂仁を加えた六君子湯を使うことで、消化器症状を改善できる。

● 加味温胆湯 (証治準繩)

半夏、陳皮、茯苓、竹茹、枳実、遠志、酸棗仁、人參、熟地黄、玄参、大棗、生姜、炙甘草

温胆湯は半夏、竹茹、枳実、陳皮、炙甘草、茯苓、生姜、大棗である。痰熱により胆熱内擾し胆胃不和になると悪心嘔吐、イライラ、不眠、驚きやすいなどの症状が出現してくる。痰熱が心を燻蒸し心虚となると動悸、不眠、煩悶などの症状が現れるから、益気養心安神の遠志、酸棗仁、人參、熟地黄、玄参を加えて、痰熱を冷まし、胆胃和解、寧心安神を図る処方である。

● 丹参飲

丹参 白檀香 砂仁

丹参は血熱を冷まして活血する。白檀香と砂仁は芳香作用で気を強くめぐらせる。血は気的作用によって巡っている。半夏瀉心湯を使う症例では気が滞っている。それによって瘀血が生じ、固定した痛みや脈渋などがある場合にはこの処方を付け加えると改善できる。

ここで例題をもう1つ解いた。

60歳 女性

【主訴】20年続く胃痛、胃脹

【現病歴】20年前飲食の不摂生で胃が痛くなって、よく張ってくる。その時々には治療していたが良くならなかったため治療を求めて来院した。

【既往歴】胆石症。7年前に指摘された。胆泥や砂状の胆石が見られた。

【現症】

体形： 太り気味。性格はせっかち。

胃腕部が強く脹って痛い。

左脇部に脹痛、特に午後2-3時から顕著に感じる。

しゃっくり、胸焼け、噯気が良く出現し、胃酸が口に上がるのが気になる。

食欲普通

便秘： 便が硬い。便秘薬を服用している。

睡眠： 入眠困難。中途覚醒。一度目が醒めると再度深く眠れない。

舌：淡紅色、やや厚い。舌尖：少し赤い。舌苔：薄白微膩

脈：弦細滑上魚際

【考察】

20 年来の食事の不摂生——脾胃に負担がかかりやすく、痰湿をためやすい。

張って痛くなる——胃気が降りないためか。

太り気味——痰湿証か。

せっかち——肝気鬱結しやすい性格。

胃腕部が強く脹って痛い——張って痛いのはやはり気滞。

左脇部に脹痛、特に午後 2-3 時から顕著に感じる。——少陽の邪が活発になる 2——3 時に左脇腹の足少陽胆経、足厥陰肝経であろう、経絡と一致する部位の痛み。

しゃっくり、胸焼け、噯気が良く出現し、胃酸が口に上がるのが気になる。——胃気が上逆している所見。

食欲普通——脾は保たれているようだ。

便秘 硬便——陰血を消耗したため。

入眠困難 中途覚醒——肝血虚により安眠できない。

舌：淡紅色、やや厚い。舌尖：少し赤い——舌尖=心か？

舌苔：薄白微膩——それほど湿は溜まらず化熱している様子はない。膩苔があるのである程度は湿を瀉さなければならないか。

脈：弦細滑上魚際——弦=肝 細=陰血虚 滑=痰湿 上魚際=肝気上亢している。

【病性】 裏平実

【病勢】 邪実

【病位】 胃 肝

【病邪】 気滞 陰血不足

【弁証】 肝気鬱結 肝胃不和 胃気上逆 肝陰血虚

【治法】 疏肝理気 調和肝胃 胃気降逆 補陰肝血

【処方】

清半夏 6	黄連 3	呉茱萸 2	青竹茹 9
蘇 葉 5	紫蘇梗 9	旋复花 9 (包)	丹 参 12
檀 香 5	杭白芍 10	川楝子 9	元 胡 10
青陳皮各 9	炒枳実 12	火麻仁 12	明天麻 12 生龍牡各 30 (先煎)

半夏は上逆した胃気を下げる。

黄連と呉茱萸は左金丸の方意。降逆止嘔。

竹筴は胃、肺を冷まして止嘔する。

蘇葉、蘇梗（そこう）は解鬱し気を巡らせる。

旋覆花、檀香、川楝子、元 胡、青陳皮、炒枳実、麻仁などはすべて気を下げる働き。

竜骨牡蠣も重さで気を下げる。

天麻は熄風を収める。

元胡は玄胡索で行気活血・止痛で、丹参も行血活血である。

全体で、肺、胃の熱を取り、気を下に降ろすことで痛みを除き、愁訴である胃の痛みを取る処方となっている。

この処方は気を下げることに特化している。蘇葉は軽く上に上がる性質があるが、この場合には肝鬱を解する目的として使われており、同じ紫蘇の植物でも、蘇梗は紫蘇の茎枝であり、気巡らせるほうが主な作用である。

【コメント】

路先生は、脳を使う仕事をしていることすら、中医理論が出来た当時の人間から比べれば「ストレス」であり「肝病」だと言っておられる。当時は肉体的な仕事为主であったろうからまさにそのとおりだと思う。栄養も良くなったのか悪くなったのか分からないが、当時から観れば飽食の時代といってもいいかも知れない。

第 6 回では肝鬱による胃脘痛に対する治療として、弁証を中心とした講義を受け、第 7 回では半夏瀉心湯についての詳しい解説と、その効果的な使い方、合方などについて詳しく講義を受けた。半夏瀉心湯はエキス剤にもあり使いやすい処方であるが、内容を良く吟味すると（知っていれば）非常に幅広く使える薬であることが良く分かった。

特に寒熱・虚実挟雑について今後注意して使用していきたいと思う。

今回の勉強会では半夏瀉心湯が主題でした。例題で処方された方剤にも半夏が必ず見られましたが、清半夏や姜半夏などと書かれていました。半夏は毒性が強いので、生姜と煎じることで弱毒化できるということは知っていましたが、炮製について詳しく知らなかったなので調べてみました。

半夏の性質は辛燥で、咽乾・舌のしびれなどの副作用がある。生半夏の性質はさらに激しく、咽喉の刺激・舌の腫脹・失声・嗄声 などの中毒症状が発生するので、一般に十分に炮製してから使用すべだといわれています。実験によると、明礬で炮炙したとき、明礬は動物に対する半夏の発声 障害を除去し、生姜で炮炙したとき、生姜は半夏の制吐作用を強めるようです。

“半夏を炮製すると薬力が低下するので生半夏を用いるべきで、副作用の緩和には生半

夏を砕いて生 生姜に 10 分ぐらい漬けるだけでよい” との考え方もありますが、一般に生半夏を内服に用いないほうがよいようです。寒痰による呼吸困難・咳嗽で生半夏が必要な ときには、生姜を多量に加えて毒性を弱めるとともに去痰・鎮咳の作用を強めるべきだといわれています。下記に修辞した半夏について列挙します。

・ **姜半夏**

水浸した後生姜・明礬と煮る。燥湿・去痰・制吐の力が強いので、脾虚水犯による胃内停滞・寒痰によく用いる。

・ **法半夏**

水浸した後甘草の煮汁と石灰の混合液に漬ける。毒性はないが有効成分も消失するという説もある。燥性はやや弱く、健脾和胃作用がある。脾虚湿困。痰飲内停に用いる。

・ **清半夏**

冷水に浸し、頻回に水を代えてなめても痺れない程度にさらす。その後乾燥させて明礬と煮る。辛燥の性質が弱くなっているが、毛痰燥湿に優れる。

・ **竹瀝半夏**

竹瀝と煮る。半夏はもともと辛温であるが、竹瀝は寒なので清熱化痰に変化する。

・ **半夏麴**

清半夏の粉末と小麦粉を混ぜ、姜汁を入れて塊状に練って発酵させたもの。辛平・微甘で温胃化滞・解鬱の効能がある。脾胃気虚の痰湿食積を治すのに適する。

半夏を服用して中毒症状があらわれたときには、砂糖で漬けた生姜片を服用するか、生姜を砂糖漬けにした汁を飲むと緩解するといわれています。